HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

タイトル	清水幾太郎忘れられた人気者の社会学 竹内洋『メディアと知識人清水幾太郎の覇権と忘却』(中央公論新社2012年)を手がかりに
著者	犬飼,裕一; INUKAI, Yuuichi
引用	北海学園大学学園論集(155): (1)-(15)
発行日	2013-03-25

清水幾太郎 忘れられた人気者の社会学

竹内洋『メディアと知識人 清水幾太郎の覇権と忘却』 (中央公論新社、二〇一二年)を手がかりに

のです。」(ピエール・ブルデュー『社会学の社会学』、田原音和訳)た暴力のメカニズムが明るみに出されると、暴力だ、とわめいてみせるまって、まったく勝手な裁きを押しつけている連中が、いったんそうしまって、まったとには、日ごと互いにおだてあうために小さなクラブに集

誰もが知っていながら語られない知識人

的な像を結ぶはずである。

ンスは、

ある。ゾラとサルトルを結ぶ線を考えれば、「知識人」はかなり具体

ジャン=ポール・サルトル (一九〇五―一九八〇) の国でも

1.

「知識人」という言葉がある。日本ではこの言葉と長らく結びついてきた岩波書店の『広辞苑』には、「知識・教養のある人」という素っないに、これの一のでは事実で、「知識・教養のある人」という素っなドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」と題する一なドレフュス事件に際して「私は糾弾する(J'accuse)」という表にいる。

ンガージュマン (engagement)」ということになるだろうか。フラ犬 飼 裕 一

在へと押し上げたが、同時に特定の「知識人」もまたそれらに匹敵には一挙手一投足が注目の的になり、日々刻々の発言をメディアがには一挙手一投足が注目の的になり、日々刻々の発言をメディアが大変知るといった存在になってしまったりする。ところが、何かの実況中継し、しかもそれが多大な影響を与える。ところが、何かの実の知るといった存在になってしまったりする者もいる。絶頂期ではなくなったり、ある時期猛烈なまでの名声を博し、後にはそう知識人の中には、ある時期猛烈なまでの名声を博し、後にはそう

なる事態が生じ、 称するようになったのである。 する位置に押し上げてきた。 人気者や権力を持った人々が 知識を持った人々が人気者や権力者に 「知識人」を自 • 他

てい ある。 間を経るごとに、 は、 いるということである。 それは、文章(文字言語)で表現された内容に強い忠誠心を抱いて て何か特別な貢献をしたのかを常に考える。 適応していこうとする。 に定着しようとする。 た貢献をしようと、さらに努力する。そして、しばしば極端に走る。 かも、 トルがゾラに学んだように、 その上、知識人には他の類型の人々には少ない一つの特性がある。 しかも、 る。 過去の知識人と似た考えを、 特定の型の文章表現によって特定の様式に考えるように導かれ 逆に言えば、 先行者に比べて地味な表現では、 つまり、 先行者よりも印象的な表現によって「偉大な思想」をさら この種の人々は過去の前例を学ぶことに熱心なので、 模倣されるごとに、 過去の 人は文章 文字言語というのは保存性が良いので、 前例を尊敬する人々は、自分が前例に比べ 「知識人」 (言語) 次第に特定の型を作り出し、 よりたくさん抱くことでもある。 が書いた本をたくさん読むこと を使って考えているのと同時 極端化していくという傾向に 誰も見向きをしないからで しかも、 前例になかっ 、それに 時 サ

波書店、 水幾太郎(一九〇七—一九八八)がいる。社会学者でもあり、『社会的 「戦後」 (河出書房、 九五〇年)、 と呼ばれる時期の日本を代表する「知識人」の一人に、 『社会学入門』(光文社、 九四〇年、 後に角川文庫) 一九五九年)は同時代の ゃ 『社会学講義』 (岩 清

> 究者、 代表的な教科書として長く版を重ねた。 としても知られたが、一般向けには論壇のスター さらにはアメリカのプラグマティズムや社会心理学の オーギュスト・ 代表的 コ ント 専門家 「知識 · の研

人」――としての存在が大きい

に忘れられた点で丸山とは対照的である。 ろいろな意味で多様な執筆活動を展開した。 で、史的唯物論や民族精神から、平和、 --九九六)と並ぶか、 ますます盛んになり、一九五〇年代の絶頂期には丸山真男(一 メーデー、 すでに一九三〇年代に活躍を開始し、 ソ 連、 中国 それ以上の名声を誇った。 安保問題、 さらには ファシズム、 戦争をはさんで著述活 ただし、没後には急速 「核の選択」まで、 守備範囲も驚異的 再武装反对、 九一四 ζJ

なども清水訳で広く普及しており、研究者を含めた大勢の読者が「名 『社会学の根本概念』、 る。 もまだ新刊書店で入手可能である。 名著の評判が確立していた『論文の書き方』(岩波新書、一九五九年) こうしてみると清水の実力は決して侮ることができない。もちろん、 盛りの少年の心をがっちりとつかむ一冊であった。 太郎の『本はどう読むか』(講談社現代新書、 読書経験を書くのをお許しいただくと、 もいろいろな形で心に残る著者であったのは事実である。 うではない。一九六○年代後半生まれの本稿の筆者の世代にとって 、が激しい新書市場にあってこの本はまだ現役で版を重ねている。 ところが、 E Η 清水幾太郎の名前が完全に消滅したの カーの 『歴史とは何か』や、 ゲオルク・ジンメル さらに翻訳者としての清水がい 高校生の頃に読んだ清水幾 の マックス・ウェ 一九七二年) 『社会学の 現に、 かとい は、 入れ替わ 個人的] 背伸び そ

ŋ

訳 の世話になっているのである。

郎である。分野を社会学に限れば、 てきたのだが、主題として取り上げることはなかった。 誰もが知っていながら、 多くが語らない知識人、それが清水幾太 誰もが実は読んでおり、

うに、今日でもやはり外国の知名人の名前を掲げた研究が日本の社 そもそも社会科学の領域で過去の日本の著者を主題的に取り上げる 会科学の主流をなしていることは間違いない。 は別にして、清水幾太郎自身が外国学説の熱心な紹介者であったよ この問題に、なぜなのかと問うことはたいして意味がないだろう。 むしろ例外に属するからである。どのように評価するのか

がどう対応してきた上で避けて通ることができないともいえるかも な清水を主題として取り上げることは、 も誰もが世話になっており、 清水ほどの水準を維持した人物は少ない。誰もが知っていて、 興味でもある。変転きわまりない人物はいくらでもいたはずだが、 それは「戦後」の社会の揺れ動きをそのまま反映するかのような清 水の揺れであり、 ただし、清水幾太郎には多くの同時代人にはない興味深さがある。 そのたびに生み出された魅力満点の著述をめぐる 実は誰もが魅せられてきた著者、そん 「戦後」に社会学という学問 しか

の言論界を扱った社会学研究の成果である。 新幻想の戦後史』 内洋による『メディアと知識人 論新社、二〇一二年)である。この本は竹内が二〇一一年に出した『革 そんな課題に応えてくれる著作が近年刊行された。社会学者の竹 (中央公論新社、 二〇一一年) ともに 清水幾太郎の覇権と忘却』 一九四二年生まれの竹 「戦後」の日本 (中央公

> これほど的確な人物はいない」(竹内、 めくメディア知識人の原型として、さらには戦後史を考えるうえで 内にとって 本の「後書き」で書いているように、 「戦後」 は、 みずからの世代を総括する課題であり、 三四一 清水幾太郎は 月 からである。 「いまをとき ح

0)

を作ろうとするのと同じである。 者がよりよい哲学を求めるのは、 非難する。欠点を補った新しい哲学や思想を構想すればよい。 反対に欠点があると判断すれば批判し、 れているのか否かを問う。優れていれば賞賛し、着想を借用する。 む。 「思想家」に、哲学や思想、 ここで若干方法論の問題に寄り道をすると、 哲学者が他の哲学者の議論に取り組む場合は、 哲学史や思想史とは別の視角から取り組 当然のことである。 家電メーカーがより良い家電製品 問題が大ありだと考えれば 社会学は、「思想」や 肝心の哲学が優

る。1 社会学は当然の判断を保留して、その背景となる諸条件を問題にす の哲学や思想が登場してくる社会的な条件を問う。 これに対して、社会学はその種の判断をするのではなくて、 たとえば、 竹内洋は次のように書いている。 言い換えれば、

ていくことにもなる。」 一遍の清水論ではなく、 人の姿を明らかにしたいのだが、それは転向者や変節漢という通り にゆえ急速に忘れ去れた思想家となったかをつうじてメディア知識 - 本書は清水がなにゆえ知識人界の覇権を握り、にもかかわらずな (竹内、三一頁 なにゆえそういわれるようになったかをみ

数残している。 人物である。 清水幾太郎は、 しかし、先に書いたように、 毀誉褒貶はあるにせよ、 生前高い名声を誇りながら没後急速に忘れら 清水が重要な人物であった 今日でも不滅の貢献を多 れた

棚上げにして、「清水幾太郎」という現象がどのような条件の下に じたのかを問うのである かないのか、 家として偉大なのかだめなのか、 ことは間違いない。 かというのが竹内の本の主題となる。 あるいは清水が好きなのか嫌いなのかといった判断 そして、 清水という重要人物がなぜ忘れられ 良いのか悪いのか、 端的に言えば、 価値があるの 清水が思想 生 は た

るということになる。 な社会学者」、つまり権威者として容認している人物の判断に依存す てしまう。すると、多くの人々が「優れた思想家」あるいは うことができる。 ろでは、それぞれの論者ごとに別々の「社会現象」が存在するとい はすべてであるともいえるし、 象とは何か」という一見自明でありながら、実は容易には答えられ 社会学には一つの難問が宿命的に与えられている。それは、「社会現 社会学が気楽な立場で議論できるというわけではない。そもそも、 る問題としての社会現象というのは一体何なのかということになっ い問いである。 ただし、通常とは別の視角から「思想」 しかし、 人間が暮らす場がすべて社会であるならば、 もしもそうならば多くの人々に共有され そうでないともいえる。究極のとこ や 「思想家」 に取り組 「高名 それ

からである。

がらである。

がらである。

がらである。

がらである。

がい思想家、あるいは家電メーカーがより良い家電の価値判断 ―― 良い思想家、あるいは家電メーカーがより良い家電をってしまう。多くの人々が共有している常識的な判断に依存するなってしまう。多くの人々が共有している常識的な判断に依存するとしまる。

がらである。

竹内がいう「一流主義」を捨てることである。 ここから、社会学には一つの現実的な選択肢が登場する。それは

合もある。」(竹内、二八頁) の方が大衆や大衆インテリや時代の空気を知るにはよいという場多くの人がひきつけられるのはわかる。しかし、二流、三流の思想をの人がひきつけられるのはわかる。しかし、二流、三流の思想をの一流の思想家の研究でも一流主義が蔓延していないだろうか。もちろん「思想家の研究でも一流主義が蔓延していないだろうか。もちろん

近づいてくる。

が機太郎は、「一流主義」の対象とはならない。考えてみればずい清水幾太郎は、「一流主義」の対象とはならない。考えてみればずい近づいてくる。

ただし、まだこれでも「社会現象とは何か」という難問が解決しただし、まだこれでも「社会現象とは何か」という学問を代表していたという事実をどう取扱うのかという問題が残ってしまうのである。それは、清水が他ならぬ社会学者の一人であった。清水を二一世紀の今の視点から見て「二流、三流の一人であった。清水を二一世紀の今の視点から見て「二流、三流の思想家」と呼ぶことは不自然ではないとしても、そんな人物が「社の思想家」という学問を代表していたという事実をどう取扱うのかという問題が残ってしまうのである。

自己言及と悲喜劇

涯固執するといった姿勢をとらず、むしろ「時代の空気」にあわせ である。清水がさらに好都合なのは、一旦確保した自分の立場に生 活躍するのがここである。著者が死んで五十年たっても多くの読者 が色濃く刻印されているほど都合が良い。「二流、 る。その場合、研究対象とされる「社会学」は、特定の時代の性格 ある。清水幾太郎を社会学者が論じるというのは、まさにこれであ を社会学がどのように論じていたのかを社会学的に研究する分野で てどんどん立場を変えていった「転向者」「変節漢」だったからであ 「現代の問題」を実感するような社会学の場合は、この点で不利 「社会学の社会学」という研究分野がある。特定の時代の社会問題 まさに清水自体が一つの社会過程だったといえる。 三流の思想家」が

するにはどうしたらよいのか。 いったいどこへ向かうのか。 会の動態を静観しているのか。転向者が変節者を論じたら議論 るのか。自分は転向や変節をしないのか。あるいは不動の姿勢で社 を研究する社会学者自身は、それではどのような観点から論じてい もある。「時代の空気」に応じて立場を変える「転向者」「変節漢 ただし、「社会学の社会学」は自己言及命題を正面から扱うことで 糸が切れた凧のように漂う議論を理 は

のような態度で「社会」を論じようとしてきたのはこのためである。 ている一員であるにもかかわらず、 来、主流をなしてきた社会科学者たちが、自分自身も社会生活を送っ 自己言及の問題は、 社会科学全般にとって危険を秘めている。 あたかも自分は無関係であるか 従

> ち位置を確保するのが主流の社会科学の流儀であった。 しいからである。 そうしなければ、特定の視点から一貫した議論を構築することが難 自分のことは棚に上げて議論することで特定の立

ル・ブルデュー(一九三〇一二〇〇二)は大学世界の社会学的分析を しろ楽しんでいることである。たとえばフランスの社会学者ピエ (ダイナミックス)」と誇らしげに呼ぶこともできる。 立場や視点の変動は、「転向」や「変節」と呼べばそうだが、「動態 せ、そこにこそ人間社会の本性を見いだそうとする。 た凧が飛び去る様子にあえて注目して、めまぐるしい変貌に身を任 やめて自己言及の可能性に関心を抱く社会科学者もいる。 この種の社会科学者を観察していて毎度感じることがある。 ただし、観点を変えていうと、自分のことを棚上げにすることを 彼らが自己言及の連鎖がもたらす目眩を催すような変転を、 次々と起こる 糸が切れ

は、

間が水をかけられたりという、喜劇的な立場に他ならず、中には怖 他ならない。これはペテン師がぺてんにかけられたり、 中で一貫して継続して来た、学問的実践についての批判的反省の到 気づいたのか怖気づかせようというのか分からないが、ことさらに ス」を、それ自身の分類の中に落とし込んでしまおうとすることに 『ホモ・アカデミクス』、石崎晴己・東松秀雄訳、藤原書店、一九九 この立場を悲劇的に受けとめる者もある。」(ピエール・ブルデュー 達点であるが、これは分類者の中の分類者たる「ホモ・アカデミク 「大学世界の社会学的分析というのは、私が自分の研究そのも 行った『ホモ・アカデミクス』で次のように書いている。

とはもちろんであるが、そんな自己言及による「喜劇的な立場」 ブルデュー自身が大学人(ホモ・アカデミクス) の一員であるこ

竹 学者の社会性はいったいどうなのか。 5 かけとしては十分である。 産する。もちろん、 当人が面白がっていることは間違いない。 .内洋は清水幾太郎の回想を引用している。 ーもいうように、 警官が逮捕され、 社会学者自身の社会性を問う場合も喜劇のきっ 人によっては悲劇的に受け取る場合がある。 法律家が法律違反を問われ、 「社会」についての専門家を自称する社会 ただし、この種の喜劇はブル ペテン師がペテンにか 経済学者が破 け

リと入って行く技術のことです。 (中略) 自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみをす。(中略) 自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみをす。(中略) 自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみをす。(中略) 自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみをす。(中略) 自分の歌や話がお客に判らなかったら、お客に楽しみをす。(私は、芸人という言葉の持つ悲しい響きを大切にしたいと思いま

からの引用 大切なのは意地だけです。」 文業者が誤って思想家などと呼ばれ、その責任とか使命とかが問題 芸人が芸能人という曖昧なものに仕立てられたように、近頃は、売 フリーのジャーナリストというのは、 ください。今は、 この私にしても、 になっていますが、これは飛んでもない見当違いで、 売文業者という身分の低い貧しい芸人なのです。いつの間にか、 売文や売文業という言葉は使われていませんが、 まあ、一種の芸人なのです。 (竹内、 三〇頁、 元来、文章を売って生きる人 清水『私の文章作法』 ああ、 芸人にとって 笑わないで

解釈をくわえると、清水のいう「芸人」というのは、みずから何か活する弱い存在(「身分の低い貧しい芸人」)なのである。個人的なとは、「お客」(メディア関係者と読者)に楽しみを与えることで生文章をまとめるならば、メディア知識人(「芸人」としての「売文業」)ブルデューは喜劇ととらえ、清水にとっては悲劇となる。清水のブルデューは喜劇ととらえ、清水にとっては悲劇となる。清水の

け入れられ 値の創出」といえば誇らしく響く。 互関係の中で辛うじて可能になる意味づけだけである。 意図を汲んで生活する寄生者である。 を生み出すのではなくて、 --- 「売れ」--- て、人気者、 他人が作り出した秩序の中で、 しかし、 唯 スターの地位を獲得したり、 生み出すのは、 その 「価値」 それを「価 が広く受 有力者 複雑な相 0

維持できたりする保証は何もない。

新参者が地位を確立するのは難しい。 な資源をできるだけ手放さないように八方手を尽くす。このため、 地位にとどまろうとする。 こととみなされている。さらに、一旦地位を確立した人物は、 の資源のほとんどを手に入れてしまうという極端な不平等が当然の 者総取り (Winner takes all)」が決まりで、ごく一部のスター も含めた複雑な条件が相互に関係した結果でしかない。 享受できるのか、 の生活がまさにそうであるように、 考えてみればずいぶんと不安定な職業生活である。 どん底のその日暮らしに陥るのかは、 まさに清水がそうであったように、 人気者になって高い名声と富を し しかも、 全くの偶然 かも、 その

笑いして物語は終わる。 を本当に刺し殺してしまう。 遇によく似た芝居の場面で現実と芝居の区別がつかなくなり、 九二年)の世界である。 は、 お笑い芸人も多くの人々と同じく苦悩や悲しみを抱えている。 といえなくもない。 多少の深読みをするならば、 ルッジェーロ・レオンカヴァッロの一幕オペラ お客に笑ってもらうことで生活してい 恋人の女優を寝取られた道化師 それが専業の道化師ではなくて、 道化師の 清水の 「名演技」 悲劇」 は、 に村祭の観客は大 『道化師』(一八 喜劇 は、 役者の内面 自分の境 「思想家 それ

ということもよくある。のはよくあるし、悲劇として演じられているのが失笑を禁じ得ない境界線はさらに意味深くならざるをえない。笑えない喜劇というもとして、「転向」や「変節」を非難される人物の場合、悲劇と喜劇のとして、「転向」

いない。ブルデューは先の引用部分に続けて次のように書いていた。(執筆活動)を続けていく業態はかなり明らかになっていくにちがの運命を呪う。ただし、その一方で「メディア知識人」が日々努力の運命を呪う。ただし、その一方で「メディア知識人」が日々努力の運命を呪う。ただし、その一方で「メディア知識人」が日々努力の運命を呪う。ただし、その一方で「メディア知識人」が日々努力しながら営業を続けていく業態はかなり明らかになっていくにちがいまがら、芸術を明られているば、喜劇とみなすにせよ、悲劇ととられない。ブルデューは先の引用部分に続けて次のように書いていた。

「私としては、本書がその結果を提示している経験というのは、デーへの頁)
 (ブルデュー『ホモ・アカデミクス』、九一一○頁)
 (ブルデュー『ホモ・アカデミクス』、九一一○頁)

日本人を対比すれば、毎度おなじみの国民性論になってしまう。も語る。いわゆる「エスプリ」を尊重するフランス人と、悲劇偏愛の「ああ、笑わないでください」と釘を刺す清水幾太郎は芸人の悲哀をブルデューは動物園の檻に自分から入った自分を楽しげに想像し、

ぎである。多い。ただし、ここで重要なのは、自己言及がもたらす認識のゆらあらんフランス人も日本人も多様で、正反対の嗜好をもった人物も

が異なってしまうからである。 が異なってしまうからである。 それは日本の社会学者の竹内洋が 社会学者の清水幾太郎を語る場合にも共通する。自分とは無関係な では当るの形式を必要とする。それは日本の社会学者の竹内洋が なった語りの形式を必要とする。それは日本の社会学者の竹内洋が とこの国でも、自己言及は社会科学者が通常用いているのとは異

に入れて公開することでもあった。 に入れて公開することでもあった。

社会学は自己言及を開始したと考えることもできないだろうか。 さらにいえば、清水幾太郎が社会学者であることによって日本の

3. 言葉に操られる人々

て 置であると、社会学の言葉を使って表現したことにある。 枠組みを用いた成果である。 てくる状況に至っている。 今日ではその種の流行も一段落し、 たことにある。 例についてすら比較的容易に応用可能な分析枠組みを提供してくれ たように、ブルデューは自己言及の危うさをあえて冒すことによっ の意義は、 社会科学に普及し、いろいろな分野の人々が盛んに用いた。それが として清水幾太郎を分析するという側面である。ブルデューの仕事 のである。「文化資本」や ただし、ブルデューの最大の魅力は、 竹内洋の『メディアと知識人』にはもう一つの側面がある。 従来の社会学とは異なった形で「知識人」と「知識」を論じた。 ピエール・ブルデューの知識社会学 ある時期には「インテリ俗語」と呼びたくなるほど広く人文 社会における権力について語る言葉そのものが権力の装 特に魅力的な造語の力はこの人物の身上と呼ぶべき もちろん竹内の研究もブルデューの分析 「象徴資本」、「ハビトゥス」といった用 入念な実地研究による成果が出 他の国の異なった時代の事 (知識人社会学) 先に書い の応用例 それ

文化的正統派たるべく、自分の位置を高めたり維持したりしようと系的傍系知識人である。したがって、清水の言説を、正系的傍系が丸山のように東大教授ではなく、ジャーナリスト(戦前)や私学教九一四一九六)のように、山の手階級出身ではなく、下町出身、十で、その限りでは知識人界の正系だったが、丸山真男(政治学者、トで、その限りでは知識人界の正系だったが、丸山真男(政治学者、トで、その限りでは知識人界の正系だったが、丸山真男(政治学者、トで、その限りでは知識人界の正系だったが、丸山真男(政治学者、

ることにする。」(竹内、三三頁)したい。その差異化戦略を、清水の知識人界における立ち位置に探したい。その差異化戦略を、清水の知識人界における立ち位置に探する無意識的あるいは前意識的な差異化戦略としてみていくことに

子孫が、 いた。 とは違う「知識人(インテリ)」を目指 れて育っていたはずである。明治政府によって否定された旧勢力の 者を自覚している親からは を自弁しなければならない社会階層の移動者である。 恵まれた二世であり、下町の竹屋の息子に生まれた清水は、 ト丸山幹治 (一八八〇—一九五五) であった。 真男の父は、長谷川如是閑と並ぶ対象・昭和期の著名ジャーナリス 石の大身旗本」)であったが明治維新で没落していた。 央区東日本橋二丁目。 れているのは丸山真男である。 層と、3 達成した職業上の地位の三つの基準で分類される。 ブ ルデューと竹内の整理では、 祖父の代までは幕臣旗本 明治政府の知的象徴である東京帝国大学に学び、 当時は純然たる下町で、 「世が世ならば」といった言辞を聞 清水が生まれたのは現在の東京都中 (清水の当人談では「四千石か五千 知 識人は、 「知識人」として丸山は 1 実家は竹屋を営んで 学歴と、 その上、 ちなみに丸山 2 職人の親 す 出

想像に難くない。 学部と文学部の権威の違いを加味するならば、 丸山は早くも一九五〇年に法学部教授になっている。 講座の教授になる夢を早くに絶たれた一方で、 た他は、 ナリストになる。これに対して、 ただし、清水は東京帝大教授になるという希望が挫折し、 かなり順調な知識人人生をおくる。 しかも、 丸山の父親が政府批判で筆禍事件に巻き 丸山は戦時期の兵役で苦汁をなめ 清水が文学部の社会学 九一 両者の意識の違 東京大学の 四年生ま ジ れの は

る上で興味をそそる。 込まれたジャーナリストであったことは、 二人の職業人生を比較す

囲まれた世襲者の違いである。 しないかのように説明することだからである。 位を守ろうとする。 説明するのが、大方の知識人でもある。 時に大勝負に出て既得権者の地位を奪い取ろうとすることがある。 者となりうる新参者と、 発した人物は必要以上に妥協する必要が少ない。周りがすべて敵対 者の心証を害する危険を避けるのに対し、既得権者の一員として出 どのような業界にあっても、 のに対し、丸山はすでに親の世代からの有力者なので出発点が違う。 ことに人生を費やす人々は、 かし、 「メディア知識人」として、 そんな不平等な出発点を、 その際に有効な戦略は、 ほとんど無条件に味方してくれる有力者に もっている資源を総動員して既存の地 弱者である新参者は強者である既得権 清水は一から地位を築く必要があっ ただし、地位向上をねらう新参者は あたかも平等であるかのように 多くの場合、既得権を守る 不平等をあたかも存在 た

地位向上をめぐっての競争やそのための戦略が不可欠となる。 を構成する大勢の人員には、 対的に自律したミクロコスモス」である(竹内、二一〇頁)。「界」 いう概念と用いる。 そんな知識人の世界について、 特定の職業(社会的行為)を共有する人々の「相 当然上下関係(ヒエラルキー)があり、 ブルデューは「界 champ/field」と

5の側) .はヒエラルキーがあり、中心=正統 (優勢の側) と周縁=異端 (劣 ?と聖別がおこなわれている。だから、界の要素である位置=地位 界においては、なにが正統であるかをめぐっての競争があり、選 が生み出される。 中心は、 みずからの位置やその集団の覇

0)

る。 めの闘争界」である。 権を維持・増強しようとし、周縁集団は中心にとってかわろうとす 懸賞金をめぐるゲーム場である。」 「界」は、 諸々の力から成り、「そうした力関係を変容させるた 換言すれば、 (竹内、 界は正統派の地位の攻略という

いていこうとする。 ここから竹内は挑戦者・周縁者としての清水幾太郎の人生を読み解 も弱者や従属者の地位に押しとどめられている状態だからである。 は現状維持であり、そうではない人々にとって現状維持はいつまで 攻撃者・挑戦者とならざるをえない。 既得権をもっ 中 心 は防衛者で、 既得権者にとって最良の結果 失うものが少ない 周 は

失うものが少ない人物は通常のことをしていたのでは二流以下の人 丸山のような人物は失うものがたくさんあるので、 のような「正系」「中心」に負けてしまうからである。 に注目を集めていなければ、清水のような「傍系」「周縁」は、 た極端から極端への振幅の大きな言論活動を説明しようとする。 る。 もった人々が平和を愛好するのは理由のないことではない のに対し、防衛者は経歴に傷がつくような新規事業や長いつきあ を避けようとする。 乱状態を必要とする。防衛者はすでに手にしている利権を失う危険 略」をとる(竹内、 まま安定して続けていくほうが合理的だが、 同業者の評判を落とすような批判は避けようとする。 挑戦者は常に「華々しい戦略」と必要とし、 竹内は、 丸山と対比することで、 二一二頁)。挑戦者は自分の地位向上のために争 挑戦者は派手な物言いで注目を集めようとする 清水が生涯にわたって展開 清水のような比較的 防衛者は 従来の行動をそ 言い換えれば 慎 既得権を のであ 重 な戦

0)

ディア世界とは別の大学世界の権威に挑戦することを意味したのだ物と見なされてしまう。メディア知識人として勝利することは、メ

他 という漠然とした言葉でしか表現できない社会的関係が当人を含め 固定していくのだと考えた方が、 差をも含めた人々の では説明できない。 う説明が、すぐに想起されるだろう。 や研究機関といった組織に属して収入を保証されている専門研究者 ち込んだりすることもありえない。このような例を挙げると、 ライター」が学会誌に投稿したり、 とえば、 て複雑に構築されており、 が過去に発表した文章はいつまでも残存し、当人を拘束する。「世評」 発表する仕事をしばらく続けていれば誰でも実感するように、 らない。知識人たちは社会に働きかけているつもりになっているの け」という発想が誤りの元でもあることは強調しておかなければな によって社会に働きかける人々である。 よって社会を動かそうとする。 !の領域の仕事に手を染めることが少ないという現象は 原稿を書くのはためらわれるし、何でも屋といった調子の「フリー 本稿の冒頭 筆一本で生きて行くフリーライターでは経済的背景が違うとい 「高遠な学理に生涯を捧げる専門家」が、 社会から大きな制約を与えられている。 の議論にもどるならば、 相互関係こそが、 むしろ、 しかも時間を経るごとに強化される。 経済的背景がもたらす社会的地位の格 ただし、 はるかに自然な理解を可能にする 学術書の専門出版社に原稿を持 「知識人」 人々を特定の専門的な業務に しかし、 この種の一方的な「働きか 彼らは言葉を操ることに 同じ専門研究者でも というのは 専門外の一 文章を印刷して 経済的背景 般向け 知 大学 自分 識 た

ではないだろうか。

0)

どということはありえない。 れだけのことである。 や新聞にとって経済機会の喪失であるかもしれないが、 ア企業が罪に問われることはない。 も株主や地主だが、 存在、「過去の人」の状態に陥ってしまう。 名声を失ってしまう。あるいは、 愛顧を失うならば、 オも同じである。 定期的に原稿を依頼してこなければならない。 稿し続けなければならない。もちろん実際には有力雑誌の編集者が らない。 ればならない。 ている存在である。メディア知識人は、 べてを失ってしまう。 とりわけ、 有名な雑誌に投稿して高い評判を得るには、 メディア知識人はごくごく微妙な基盤 大切に取扱われ、 何らかの事故を起こしてメディア業界の寵愛、 メディアから「干された」 落選した代議士のようなもので、 しかも、すべて合法的で、排除した側 著者やタレントが会社を相手取って訴えるな 狭い分野の知る人ぞ知るといっ 発言が各所で尊重され 人気の連載者を失うことは雑誌 メディアで人気を博さなけ 株主や地主は メディア 新聞やテレ の上に 明日 その雑誌に投 知 逮捕され なければな ビ、 成り立っ のメディ 識人はす からでも ラジ

社や ディ るのである。 土 由に発言させているわけではない。 ようとあらゆる努力を払う。 むしろ、 の権威を必要にしているからメディア知識人に仕事が回ってく アにはそれぞれの方針があり、 ・新聞社やテレビ局に害が及ぶような発言は一切 メディア知識人はメディアの寵愛をなんとしても維持し 会社の方針に沿わない発言を繰り返す寄稿者や出演者 周知のように、 それに足しになる「教授_ まず第一に、 メディアは 企業としての出版 許さな 知識 メ

動員して拡大再生産される。 決まり文句 そして「核武装」という言説が一人歩きし始めれば、メディア知識 後ではない」という歌が流行れば皆が歌う。「安保反対」、「大学解体」、 う言説が普及すれば、大勢の人々が声をそろえて合唱し、「もはや戦 特定の言説がどのように生まれてくるにせよ、一旦普及した特定の アから撤退を決め込む丸山真男のような「東大教授」とは違う。 人としてはすぐに駆けつけて唱和しなければならない。 このように考えてくると、 お呼びではない。 同時に言葉に操られる人々でもあることに考えが及ぶ。 —— 言説 この点は、 | は、 メディア知識人は言葉を操る人々であ 「悔恨共同体」や「無責任の体系」とい 多くのメディア人、メディア知識人を 何 .かの事件をきっかけにしてメディ

幾太郎を事例として観察することであった。
に、特定の言説がこの種の人々によって拡大される仕組みを、清水かを、いろいろな角度から社会学として分析することである。さらディア知識人」という類型の人々がどのような生態をもっているのア知識人」を非難することではない。やるべきなのは、むしろ「メただし、ここで重要なのは、この種の付和雷同を指して「メディただし、ここで重要なのは、この種の付和雷同を指して「メディ

艹 POST FESTUM ~祭りの後で

の著作が、今日でも多くの読者を持っているのに比べて、括弧付きらに前の柳田国男、西田幾多郎のようにもっと古い世代の著者たちのように評価できるだろうか。何より印象深いのは、和辻哲郎やさわれる時代の「思想家」たちをかなり離れた世代から観察するとど喜劇にせよ悲劇にせよ、祭りの芝居はいつか終わる。「戦後」とい

熱く語り合っていたのか、後になるとわからなくなってしまう。 古くさい話になってしまう。 充実した読書体験を実現するとしても、 ことがなくなっていく。特定の時代背景を共有した人々にとっては ていた著者たちも、 な変節にあるのだといった評価がよくある。 陥りつつあることである。 0) 「戦後」を代表する著者たちが時間の経過とともに寂しい事態に これは時間の経過だけからは説明できない。 熱狂的に支持した世代が老いていくと読まれる 清水幾太郎の忘却の原因は当人の なんでこんな本を多くの読者が読んで 世代が変わればずいぶんと しかし、 一貫性を誇っ

象を抱きかねない。 象を抱きかねない。 象を抱きかねない。 象を抱きかねない。 の時代に極度に特化した人物である。時代が変わると、敗彼らはその時代に極度に特化した人物である。時代が変わると、敗彼らはその時代に極度に特化した人物である。時代が変わると、敗ないる。 のは、「メディア知識人」という類型であろう。

ストセラーとしてメディアが注目することはない してきた。 ハイデガー 清水がサルトルより二つ年下というも興味をそそる。 較するとよくわかる。 いう類型が決して日本だけの特殊現象ではないということである。 八八九年生まれのハイデガーと一九〇五年生まれのサルトルを比 ただし、ここで重要な問題がある。 和辻哲郎についても「戦争責任」をめぐる論評は繰り返し登場 しかし彼らの著作は今でも多くの読者を持っている。 はヒトラー政権時代の行動の責任を長く糾弾されてきた ハイデガーが和辻哲郎と同じ年の生ま それは、 「メディア知 が、 周知のように 定の数

をあきらめて大学その他の本業に戻ることもありうる。 前の市場 知識人が誇らしげに自称した「アンガージュマン」というのは何だっ を把握できないくらいである。 デガー研究大国である。 在と時間』の翻訳書が何種類も飽きることなく刊行されてきたハイ トルの全集は長らく絶版である。 れる」人物が交錯し、いつまでも人気者であろうとするならば持ち 業としてのメディアの消長 メディアの多次元での移り変わり ―― 伝達される情報の変化と、 人なのだという、素直に考えればごくごく常識的な判断に行き着く。 んに比べて衰退が激しい。 すると、メディア知識人というのは知識人というよりもメディア で膨大なハイデガー全集が日本でも売られているのに対し、 をするには、 かという問題につながる。 調査力で業務転換をしなければならない。 影響を与えられたり、 メディアの寵愛を維持しなければならなかった。 研究書や論文に至っては専門家ですら全貌 このように考えてくると、昔のメディア ―― に呼応して、「売れる」 人物と 「干さ メディア知識人が「アンガージュマ これに対して、サルトルは往事の名 研究や評論を書いたりしている。 そもそも日本はハイデガーの もちろん、 それ サ 『存 企 高 ル

をめぐる特定の専門分野の研究水準がこの数十年のうちにかなり深 られる一方で、 化しているのも事実である。 は盛況である。 人をめぐる状況も大きく変わっている。 ただし、「戦後」と呼ばれた時代と今日ではメディアとメディア知 が次第に小規模になり、「活字離れ」が深刻そうに語 メディアに登場する「識者」の嘆きとは別に、 インターネットを媒介とした紙を用い そもそも情報量が格段に増えている。 何度も繰り返され ない 「思想」 た

> 的影響力をふるっているように見えたメディア知識人のあり方こそ こうして考えてくると、「戦後」と呼ばれる時期に異常なまでの社会 歴史上例外的だったのではないの か

が、

ければ、 あるかのように思われていたにすぎないのでは の取り上げるとこととなり、それがあたかも国を挙げての がら自己産出を繰り返す 好奇心や歓びを覚える人は一定割合いるが、 と同じ理屈である。 の人文社会科学の水準が今よりも際立って高かったわけではな の学生は昔より勉強しなくなった」と主張する一方で、 の人口比はたいして変わるものではない。どんな時代でも教師は「今 会に人文社会科学が扱う「思想」や「知識」に特別な関心を抱く人々 的でずいぶんと乱暴な推測を述べさせていただくならば、 元化され、 して、それがインターネットに代表される「情報革命」によって多 て成立した知識と知識人の特殊なあり方だったのではない それはメディア企業の大規模化と特権化・独占化に歩調 消滅することもない。むしろ少数者が互いに参照し合い 要するに昔の状態に戻っただけなのではない 何時の時代にも抽象的な理論を探求することに 「思想」が、たまたま特定の特権 劇的に増えることもな な 0) 肝心の 0) を合い 特定の社 しわせ

視聴率競争のような発想そのもの かいった基準であらゆる知識を評価するような、 ないということである。 にすぎないとしても、 か。 ちろん誤解されては困るのは、 視聴率獲得競争はメディア企業に任せておけばよい それをもって価値が低いなどと考えては むしろ、 のが、 多 数の人々が支持しているかどう たとえ少数者のみが関心を: つの時代の遺物なのではな そんなテレビ のでは 局の

41

いだろうか。

が読めば、 思想家」の方が社会学の対象としては論じやすい。思想史にとって 方絶版になった「二流、三流の思想家」たちの本なのである。 であったなどということもある。そんな同時代の「大衆や大衆イン まり文句でも、当人は時流に抗して一人木鐸を鳴らしているつもり るとみなされていたなどということもある。時代がかった陳腐な決 える論評が、同時代の人々にとっては時代を代表する知的良心であ 理解するには、 は古くさくて退屈な昔の知名人の書いたものも、背景となる社会を の方法論場の違いに触れてきた。 な問題を再度考えることができる。本稿では先に、思想史と社会学 社会現象が社会学としていかに論じられうるのかという自己言及的 テリや時代の空気」が当時のまま保存されているのが、いまでは大 実は、 このように考えてくるならば、 本稿を執筆することを思い至った原因は、 知的な批判というよりも下品な罵詈雑言であるようにみ - 新鮮な素材に満ちているといえる。後の時代の人々 竹内がいうように「二流、 社会学者である清水幾太郎という 竹内が清水によ 、三流の

なすことができる。」(竹内、三三六頁)も、自己を準拠としたリフレクション(自己言及による反省)とみな清水の予言者=知識人批判は、自己を抜きにした論説というより放った矢は清水自身に戻り、ブーメラン効果をもたらす。このよう放った矢は清水自身に戻り、ブーメラン効果をもたらす。このようが、「これは六○年安保闘争までの知識人を批判したものであるが、「これは六○年安保闘争までの知識人を批判したものであるが、

る知識人批判について次のように書いているからであった。

自分自身を批判することである。他人に投げつけたブーメランは、社会学者清水幾太郎が「メデイア知識人」を批判することは、結局

1

自分のところに戻ってくる。しかも、社会学者として清水幾太郎は自分のところに戻ってくる。しかも、社会学者として清水幾太郎は自分のところに戻ってくる。しかも、社会学者として清水幾太郎は自分のところに戻ってくる。しかも、社会学者として清水幾太郎はとを自覚している。

殊分野が成立し自己産出されているのではないだろうか。株分野が成立し自己産出されているのではない。むしろ省察(リフレクとしてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及としてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及としてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及としてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及としてとらえる。もちろん、どれも妥当である。しかし、自己言及としてとらえば、自己言及は単純な自己産出されているのではないだろうか。

の示唆を含んでいるのである。とは「社会」と「思想」、あるいは「知識」の関係を考える上で多くるかのように思われた時代は、過ぎ去っている。もちろん、このこるかのように思われた時代は、過ぎ去っている。もちろん、このこ

(二〇一三年二月一日)

古くからある思想史との間で緊張関係に陥る。思想史は偉大な思想家とりわけ知識という現象を扱う社会学の場合、一層困難で、しかも

である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。登場するのはデカルトやへーゲルのような人々であり、この時代背景や社会情勢に適応しているという点では、むしろ、デカカルトを論じることで一七世紀のフランス社会を論じたことになるのか。むしろ、デカルトのような人物は例外的な存在で、当時の主流のか。むしろ、デカルトのような人物は例外的な存在で、当時の主流のか。むしろ、デカルトのような人でである。特別であり、そうである。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。登場するのはデカルトやヘーゲルのような人々であり、の歴史である。

と言われたときの「革新」である。
「しかし、戦後史と言っても経済史や政治史など多面的である。「しかし、戦後史と言っても経済史や政治史など多面的である。「しかし、戦後史と言っても経済史や政治史など多面的である。

後史』、中央公論新社、二〇一一年、言頁))論)そのものだったからである。……」(竹内洋は『革新幻想の戦に大学に入学した世代にとって、革新幻想はキャンパスの空気(世というのも、わたしたちの世代、たぶん一九七〇年あたりまで

いたのは残念である。 「空気」をもっぱら日本人と日本社会の特有現象であるかのように論じて日本の著者に特有の強固な自意識(とその反面の無知)のために「空咒』(初版、一九七七年)であるといわれている。ただし、この世代のきっかけになったのは、山本七平(一九二一―九一)の『「空気」の研きなみに「空気」という印象的な用語法が日本の著述世界に定着する

味だからである。ただし、人文社会科学にあって自己言及命題がすべ可能であるだけではなく、そもそも論証しようとすること自体が無意とされる。端的に言えば、「私は嘘を言っている」という命題は論証不3.自己言及命題は自然科学を中心とした通常の科学論では無効である

につながっていくことはここでくりかえすまでもない。ん、このことが人文社会科学が「科学」であるかという昔からの論顕て無効で、排除されるべきなのかといえばこれはむずかしい。もちろ

傑作集1 や権威を笑いものにする嗜好が強くみられることである。その代表例 る。ブルームズベリー・グループが興味をそそるのは、 学者のジョン・メイナード・ケインズも一員であったことは有名であ 新社、二〇〇四年に収録されている。ガーネット(一八九二―一九八 季弘はこの事件を取扱った著書で次のように書いている。 代表する誇り高いイギリス海軍だったのである。ドイツ文学者の種村 れてよいだろう。しかも、相手は大英帝国の絶頂期に帝国の軍事力を 隊を堂々と嘲笑する知識人集団がイギリスにいたということは記憶さ 生の悪ふざけととらえることももちろん可能だが、巨大組織である軍 ちが罰せられることはなかった。恵まれた社会層に属するエリート学 なったが、海軍の面目がつぶされた反面で違法行為はなく、「犯人」た に、当人たちがことの詳細を新聞に投稿したことで大きな社会問題と を訪問し、イギリス海軍の軍艦に乗り込んで盛んな歓待を受けた。後 の扮装をして「皇帝の使節団」を名乗り、お召し列車を仕立てて軍港 バージニア・ウルフら当時大学生だったメンバーが、偽エチオピア人 が一九一〇年の「偽エチオピア皇帝事件 Dreadnought Hoax」である。 プ、後に知識人集団で、平和主義や左派自由主義を信条とした。経済 ルフらによって一九〇五年頃にケンブリッジで結成された学生グルー の一員であった。ブルームズベリー・グループは、ヴァージニア・ウ 一)はイギリスの作家で、いわゆる「ブルームズベリー・グループ」 David Garnett, A Man in the Zoo, 1924. 日本語訳は『ガーネット 狐になった人妻、動物園に入った男』、池央耿訳、河出書房 当初から権力

河出文庫、一九九〇年、二九頁、初版、学林書林、一九七五年)事として記憶されたはずである。……」(種村季弘『詐欺師の楽園』、忽然として消え去ったとでもいうような趣きの、奇々怪々な出来役者一行が空の彼方から舞い降りてきて一場の笑劇を演じたあとが口をすべらせなければ、何者の仕業ともしれぬ、宇宙人の道化が口をすべらせなければ、何者の仕業ともしれぬ、宇宙人の道化

- 5 視点を変えれば、悲劇と喜劇の違いは物語の求心力の違いにある。 ちらに拡散していくのが喜劇である。これに対して、喜劇は突然降りかかってくる遠心力によって笑いを実現する。ほんの少しの意識の食い違いが拡大し、予想外の結末がやってきて観客の笑いを誘う。最初に与えられた本筋予想外の結末がやってきて観客の笑いを誘う。最初に与えられた本筋予想外の結末がやってきて観客の笑いを誘う。最初に与えられた本筋の物語が一貫して続けられるのが語劇である。
- 屋書店、一九六五年。
 6 チャールズ・ライト=ミルズ『社会学的想像力』、鈴木広訳、紀伊国
- 二〇六頁以下。 は避けたい。拙著『方法論的個人主義の行方』、勁草書房、二〇一一年、は避けたい。拙著『方法論的個人主義の行方』、勁草書房、二〇一一年、- ブルデューの議論については拙著ですでに論じたのでここでの詳論
- ま立いた国人が目が、まないというではないによっている。 は立いた国人が同じ、 である丸山真男の経歴に役立ったことは理解しやすい。 である丸山真男の経歴に役立ったことは理解しやすい。 と長谷川如是閑らが同紙を追われることになった。事後、大阪朝日新した「米騒動」事件をめぐる報道が、当時られた大阪朝日新聞が掲載した「米騒動」事件をめぐる報道が、当時8 一九一八年の「白虹事件」。大正デモクラシー期、急進的な論調で知
- でいろいろ形を変えて論じたのでそちらに譲りたい。全般に悪影響を及ぼしてきたことは、拙著『方法論的個人主義の行方』きかけるという古くからの想定が、社会学だけではなく広く社会科学9 独立した個人が同じく独立した実在としての「社会」に一方的に働
- 出続けたい病」と呼ぶ。この種の人々は、「「識者」としてテレビやラ観察すると、彼らには独特の病気がある。それを神門は「マスコミに呼ばれることもある。そんな少ない機会をとらえて「識者」の世界を呼ばれることもある。そんな少ない機会をとらえて「識者」の世界を今などほとんどないが、ある種のブームが起こって人手不足になると会などほとんどないが、ある種のブームが起こって人手不足になるとでばれることもある。そんな少ない機会をとらえて「識者」の世界を呼ばれることもある。そんな少ない機会をとらえて「識者」の世界を呼ばれることもある。それを神門は「マスコミに登場する」という。

ジオに出ると、快感になってまた出たくなる」。

大学の教員や研究機関の研究者は日頃狭い研究領域を扱っている者」に言わせることができるから安心だ。」(神門、六八頁)マスコミのほうとしても、自分たちの意図したような意見を「識でおす。一度、マスコミと縁ができると、政界や財界や官界のトッはある。一度、マスコミと縁ができると、政界や財界や官界のトッはある。一度、マスコミに出続けたい」という希望を実現する方法「そして、「マスコミに出続けたい」という希望を実現する方法

三四頁)。
三四頁)。
三四頁)。
三四頁)。
三四頁)。

かは今でも版を重ねている。 寿命の長い著述家の部類に属するはずである。しかも、新書のいくつ11 通常の著述以外に古典の良質の翻訳を残してくれた清水は、むしろ

http://www.amazon.co.jp/

書籍通販サイト「アマゾン・ジャパン」および

「Honya Club」 にお

http://www.amazon.co.jp/ http://www.honyaclub.com/